

植民地に赴く西欧人

— 〈文明の階段〉の下降—

European travelers in colonized countries:
descent of the “stairs of civilization”

嵯山女学園大学国際コミュニケーション学部長

田所 光男

Mitsuo Tadokoro

はじめに

21世紀の世界地図を広げれば、国連に加盟する独立国家が境を接していて、植民地を探すのに苦労するほどであろう。こうした時代に、かつて植民地に赴いた人々について語ることは、単なる懐古趣味か、すでに完治した傷をいじり続ける病的な態度に見えるかもしれない。それでも、マダカスカルの東海に浮かぶレユニオン島やカリブ海のマルチニク島はフランスの海外県であり、またドイツ政府は、2021年5月、かつて植民統治していたナミビアでの虐殺行為を認めて謝罪している。〈過去は過ぎ去らない〉(Le passé ne passe pas)。現在とは堆積した過去であり、生起したことの一切は顕在的に潜在的に今ここにあって、消え去ることはない。

地球的規模で世界の一体化が進んだ近代。それは地球の中心が決まり、遠隔地も含め一切の地域がそれをめぐる衛星と化す事態であった。中心は西欧の内部では移動するものの、数世紀にわたりその外に出ることはなかった。本稿は、フランス植民帝国の絶頂期としばしば評される1930年前後に、植民地に赴いた西欧の人々の移動を検討する¹⁾。視

野の中心に置くのは、エルジェ (Hergé) のマンガ『タンタンの冒険』(*Les aventures de Tintin*)とシトロエン社の自動車遠征である。前者は虚構の旅であり、後者は現実の旅である。文学や絵画などには作者があって、その個性や才能によって創造されたものが作品である、というのは現在でも根強い見解かもしれない。しかしどんな天才も無からの創造を行うわけではなく、その作品は政治や社会の動き、多様な文化事象とネットワークを構成している。テキストはコンテキストの中にある。フィクションをも読み解くことで、人間の生きる世界はより広く、より深く把握できよう。

宗主国と植民地の間には無数の往還があった。その旅は〈異文化交流〉という言葉が喚起するような、平らな地平での移動ではない。一体化した地球世界には〈文明の階段〉があって、人間はそこを上り下りしている。19世紀日本はもちろん植民地とは言えないが、当時の「洋行」という言葉の輝きは、そこを上る人間の意識の一面をうかがわせてくれる。では、植民帝国絶頂の時代にそこを降りて行った西欧人は何を感じ、何を考えてい

たのか。タンタンとシトロエン、この二つの旅の検討を通して、西欧中心時代における人間の姿の一端を明らかにしたい。

1. 鹿鳴館の舞踏会

芥川龍之介は明治日本へのノスタルジーを込めて「舞踏会」(1920年、大正9年)という小説を書いている。これはピエール・ロチがフランス海軍士官として鹿鳴館の舞踏会に招かれた際の体験をもとに執筆した「江戸の舞踏会」(Un bal à Yeddo, 1889年)にインスピレーションを得た短篇である。

明治19年11月3日の夜であった。当時17歳だった——家の令嬢明子は、頭の禿げた父親と一しょに、今夜の舞踏会が催さるべき鹿鳴館の階段を上って行った。明るい瓦斯の光に照らされた、幅の広い階段の両側には、殆ど人工に近い大輪の菊の花が、三重の籬を造っていた。[中略] そうしてその菊の籬の尽きるあたり、階段の上の舞踏室からは、もう陽気な管絃楽の音が、抑え難い幸福の吐息のように、休みなく溢れて来るのであった²⁾。

「フランスのどこか温泉町のカジノ」(Loti 83)とロチに貶められた鹿鳴館ではあるが、「明子」はそこで、はじめての舞踏会に臨み、華やかな眩いばかりの階段を上っている。本稿が〈文明の階段〉と呼ぶものは芥川のこの「鹿鳴館の階段」に象徴的に描き出されている。

明治国家の構築に重要な役割を果たした福沢諭吉は、『文明論之概略』(1875年、明治8年)第二章「西欧の文明を目的とする事」の中で次のように述べている。

今世界の文明を論ずるに、欧羅巴諸国並に亜米利加の合衆国を以て最上の文明国と為し、土耳其、支那、日本等、亜細亜の諸国を以て半開の国と称し、阿非利加及び澳太利亜等を目して野蛮の国と云い、此名称を以て世界の通論となし、西洋諸国の人民独り自から文明を誇るのみならず、彼の半開野蛮の人民も、自から此名称の誣いざるに服し、自から半開野蛮の名に安んじて、敢て自国の有様を誇り西洋諸国の右に出ると思う者なし。[中略] 然ば則ち彼の文明半開野蛮の名称は、世界の通論にして世界人民の許す所なり。其これを許す所以は何ぞや。明に其事実ありて欺く可らざるの確証を見ればなり。左に其趣を示さん。即是れ人類の当に経過す可き階級なり。或は之を文明の齡と云うも可なり。(16-17)

ヨーロッパ諸国と米国が「最上の文明国」で、日本はトルコ・中国とともに「半開」にあり、アフリカ・オーストラリアが「野蛮」に位置する。明治初期にこうして福沢によって顕在化させられた世界構造はもちろん福沢の独創ではない。福沢はこの「世界の通論」を19世紀の西欧の歴史家バックルやギゾーなどの著作から学んでいる。西欧近代の自信、西欧の中心意識をも含めて学んでいる。

『学問のすゝめ 初編』(1872年)冒頭に「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと云えり」(29)と、アメリカ独立宣言を翻案して掲げた福沢は、西欧近代の普遍主義的人間論に深く心酔している。人間になるとは「西欧の文明を目的」として、〈文明の階段〉を上ることに他ならない。ここで含意されていることをいっそう明確にしておくなら、この

〈階段〉の他に人間になる道はないということである。20 世後半、人類学者クロード・レヴィ＝ストロースが批判するように、この種の世界了解は、「人間の諸社会の様々な状態を、同じ点から出発して同じ目的に収束しなければならない唯一の発展の「段階」とか「時期」として扱う」(Lévi-Strauss *Race et histoire* 23-24) ものであり、要するに、人間社会の単線的発展段階論と言える。19 世紀西欧には自由主義と社会主義の対立が顕著になってくるものの、双方とも人間社会の辿るべき道をたった一本しか認めない〈階段〉論をとるのがふつうであった。

福沢は『文明論之概略』を書いてほぼ 10 年後「脱亜論」を発表する。

左れば今日の謀を爲すに、我国は隣国の開明を待て共に亜細亜を興すの猶予ある可らず、寧ろ其伍を脱して西洋の文明国と進退を共にし、其支那朝鮮に接するの法も隣国なるが故にとて特別の会釈に及ばず、正に西洋人が之に接するの風に從て処分す可きのみ。悪友を親しむ者は共に悪名を免かる可らず。我れは心に於て亜細亜東方の悪友を謝絶するものなり。(240)

ここに福沢の転向を認める必要はないであろう。〈文明の階段〉論は持続している。この階段を駆け上がって、早急に脱亜入欧を実現しなければならない。この文章は 1885 年 3 月 16 日付の『時事新報』に掲載されている。西欧列強によるアフリカ分割が確定したベルリン会議が終わってひと月も経っていない時期のことである。今度はアジアがやられる — 現在では悪名高い「脱亜論」であるが、

こうした世界の動きの中に置くと、もう「隣国の開明を待て」ないと〈文明の階段〉を急ぐ、急がせる福沢の姿がよく見えてくる。

2. 上海租界のタンタン：敵は日本の秘密工作員

『タンタンの冒険』シリーズは、1929 年にベルギーのカトリック系子供新聞『20 世紀の子供』(*Le Petit Vingtième*) に掲載され始めたマンガである。第二次世界大戦後に出るフランスの『アステリックスの冒険』シリーズと並んで、フランス語圏の二大マンガと呼べる古典である。主人公タンタンはベルギーの若きリポーターである。「冒険」というタイトルからは未知の世界を探訪する探検物語とイメージされてしまうかもしれないが、タンタンは悪事の行われている世界各地に赴いて悪者たちをやっつける。『タンタンの冒険』は勧善懲悪物語なのである。

連載後アルバムとして刊行され、最初の 5 巻は『ソヴィエト国のタンタン』(1930 年)、『コンゴのタンタン』(1931 年)、『アメリカのタンタン』(1932 年)、『ファラオの葉巻』(1934 年)、『青い蓮』(1936 年) である。最後の二冊の行き先がわかりにくいのが、初出連載時のタイトルはそれぞれ「オリエントのタンタン」、「極東のタンタン」であった。地理的に連鎖しているこの二つのアルバムは、国際麻薬組織との戦いとしてストーリー的にもつながっている。ソ連、コンゴ、アメリカ、オリエント、極東 — この渡航先の選択理由は現在ではやや見え難くなっているが、そこには 20 世紀前半におけるベルギーのカトリック系新聞という発行元の政治的立場が関わっている。1917 年のロシア革命によって

成立した共産主義ソ連と、第一次世界大戦を経て資本主義の牽引者の地位を確立した米国は、西欧諸国にとってその中心性を揺るがす脅威であった。一方コンゴは、小国ベルギーの富の源泉とも言える広大な植民地である。オリエントもまた、古代以来、オクシデントからの視線の中に把握された地域であり、西欧は地球の中心となった後もずっとこの地域に特別な関心を抱き続け、20世紀前半には多くの土地を植民地、あるいは「委任統治領」としていた。そしてその先にある「極東」(Extrême-Orient)も、アヘン戦争や清仏戦争などによって西欧が足場を固めつつあった土地であり、とりわけ、最後の広大な草刈り場とも言える中国があった。しかし西欧に対する新たな脅威として登場した「半開」日本もそこに手を伸ばしつつある。こうして、コンゴ、オリエント、極東へのタンタンの旅は〈文明の階段〉を下るものとなる。

『青い蓮』(*Le lotus bleu*)が展開するのは主に上海である。1920年代、日本の文人たちも多数この都市を訪れていて、芥川龍之介「上海遊記」には、「上海は単なる支那じゃない。同時に又一面では西洋なのだから」(35)という言葉が書かれるほど、欧米はすでに地歩を築いている。

こうした野蛮人たちをちょっと文明化してみようという気持ちなんて起きなくなるよ!…我々にはもう奴らに対しなんの権利もないということなのか…我が素晴らしき西欧文明の恩沢を奴らにもたらす我々に? (Hergé *Le lotus bleu* 7)

『青い蓮』の上海租界の西欧人たちも〈文明

の階段〉を下ってきて、「けがらわしい黄色人種」にこう憤っている(7)。

『青い蓮』には漢字が頻繁に使われている。ベルギーの子供たちは何もわからなかったことであろう。しかしそれでいいのである。ここが西欧じゃないという異世界感を引き起こすことが狙いである。これはあとで見る『コンゴのタンタン』でも使われている手法であり、典型的なエキゾティシズムである。また、日本人の容姿や服装について特別なコメントはないものの、マンガである以上当然絵で描き出されている。そこには、ある特別な〈表象=代表〉化(représentation)を認めることができる。丸眼鏡、出っ歯、フロックコート—上海の日本人も、国際連盟の日本代表も、東京の政治家も、皆同じ姿をしている。

正義の味方タンタンが戦うのはミツヒラトという、上海租界でアヘン窟を営む日本人で、この男はその実、日本の秘密工作員である。タンタンはミツヒラトが上海—南京間の鉄道を、夜間、密かに爆破するのを見届けている。1931年の柳条湖事件からの発想である。周知の通り、これは実際には中国の東北地方で起こり、満州国の建設、日本の国際連盟脱退につながった事件である。爆破場所を上海近郊に移してはいるものの、『青い蓮』はこの事件前後の連鎖をしっかりと描き出している。松岡洋右らしき代表は国際連盟で、「今一度、日本は、極東における秩序と文明の守護者という自らの使命を遂行したのであります!非常に残念なことではありますが、我が国が中国に軍隊を派遣せざるを得なかったのは、中国自身を防衛するためなのであります!」(*Le lotus bleu* 22)と演説している。

タンタンは上海に赴き、租界に巣くうアヘ

ン密売の国際組織と戦い、暗躍する日本人工作員の動きを止めた。ストーリーをこう記述すると、ベルギーの子供たちは、極東に派遣されたタンタンの快挙を通して同時代の国際関係をよく学ぶことができた、とも言えそうであるが、すべてのリポーターが自分の視点から語るように、タンタンも同様である。1933年のゴンクール賞を受けたアンドレ・マルローの『人間の条件』も戦間期の上海を舞台にし、中国人、西欧人、日本人が租界を出入りしている。しかしストーリーの中心には国民党と共産党の対立が置かれ、そこにコミンテルンが大きく関わっている。あるいはまた、「この支那の植民地へ集っている者は、本国へ帰れば、全く生活の方法がなくなってしまっていた。それ故ここでは、本国から生活を奪われた各国人の集団が、寄り合いつつ、全くここに落ち込んだが最後、性格を失った奇怪な人物の群れとなって、世界で類例のない独立国を造っていた」(21)という横光利一の描いたような上海租界の姿は、『青い蓮』からは窺うことはできない。

3. コンゴのタンタン：「皆さんの祖国ベルギー」

上海のタンタンは悪しき日本人の策動をくじく被植民者の友であった。しかしコンゴのタンタンはかなり違う動きを見せている。そこはベルギーの植民地（現在のコンゴ民主共和国）である。タンタンは宣教師の開いた学校を訪れて、現地の子供たちに向かい「今日は、皆さんの祖国、ベルギーについてお話します」と授業も行っている。コンゴ人の「祖国」はベルギー（!）なのである。このシーンは第二次世界大戦後描き換えられて、現行

版では算数の授業になっている（*Tintin au Congo* 38）³⁾。しかしいずれにしても、勧善懲悪物語『タンタンの冒険』には悪漢が必要である。タンタンが戦うのは植民地化を行うベルギーではなく、コンゴのダイヤモンド資源を狙うシカゴのギャングたちである。

コンゴ人はどのように描かれているのか。現地の子供たちは現地語で歌を歌っている。コマの中に音符が示されているので、カヌーを漕ぎながら歌っているのだ、ということにはわかるものの、フランス語しか知らない読者にはその意味はわからない。エキゾティシズムの手法はここでも貫かれている。実はここだけが現地語で、現地の人々は例外なくいつでもブローケンなフランス語、いわゆる〈チビクロ語〉（*le petit nègre*）を使っている。タンタンも宣教師も、タンタンの相棒犬ミルーもアフリカの大蛇やゴリラも、皆、正則のフランス語を話しているのとは著しい対照をなしている。また、現地の人々の服装について揶揄するような言葉はないが、〈チビクロ語〉を話す真っ黒に描かれた人々は、例えば、毛皮のコートを着て裸足である。〈文明の階段〉をやや上り始めた人間の姿なのである（図4）⁴⁾。

1930年前後のコンゴはもはや探検の対象ではなく、植民地経営が課題となっている領土である。アントワープからの巨大な客船が岸壁に到着し、鉄道も通っている。現地ではタンタンもまず自動車で移動しており、ある時、その車が蒸気機関車と衝突してしまう。機関車を立て直すためにタンタンは現地の人たちを働かせようとするが、彼らは「疲れる」とか「汚れる」とか言って、誰も働こうとはしない。犬のミルーは「怠け者！」と叱咤し、

ひとり奮闘する。「犬にだけ働かせて、恥ずかしいのか」とタンタンは怒鳴りちらしている (*Tintin au Congo* 20)。

コンゴの人々は怠惰なのか。他者表象はその他者についてどれほどのことを教えてくれるのか。他者表象を通して、表象する側がその他者をどう見ているかは確実にわかる。アルベール・メンミ『植民者の肖像・被植民者の肖像』(Albert Memmi, *Portrait du colonisé, précédé du portrait du colonisateur*) によれば、西欧の植民者にとって被植民者は怠惰である必要があった。彼らが怠惰だから、勤勉な自分たちが留まらなければいけない、という論理である。メンミはこうした構図がリベリアからマグレブを通りラオスに至るまで一貫していたと述べている (Memmi 101-102)。コンゴでタンタンが「素晴らしい」と感動するのも、アフリカの不毛な荒地を短時日で開拓し、病院や学校を建設した西欧の宣教師たちの労働なのである⁵⁾。

4. 「ハンドルを握る人間」を謳う未来派

タンタン研究は進んでいて、タンタンがコンゴで運転している車は「伝説的なT型フォード」(Crespel 12) であると特定されている。「1908年にはアメリカのフォード社が初めて、流れ生産方式で自動車の量産を行いました。それまで自動車は一部のお金持ちの乗り物でしたが、流れ作業で多くの自動車を生産することができるようになったため、価格も安くつくることができたのです」(<https://global.toyota.jp/kids/history/automobile>) と、自社サイトで自動車の歴史を振り返るトヨタも、この時代まだ自動車を製造していない。コンゴでタンタンが運転し

ているのは時代の最先端を突っ走るフォードであった。

自動車の意義を人類史の中で考えてみると、やはり人間の陸上での移動速度が飛躍的に増加したことであろう。非常に長い期間にわたって、人間の移動のトップスピードは馬を駆ることで維持されてきた。近い時代で見ても、モンゴル帝国の拡張や新大陸の征服も馬に頼っている。馬の威力は、〈馬力〉という単位に今も残っている。いずれにしても、産業革命後、芸術家も自然を越える工業生産物に惹きつけられ、19世紀のターナーやモネは蒸気機関車を描き、20世紀に入ると、前衛芸術運動の未来派は自動車に魅せられている。1909年、イタリアの詩人マリネッティは「未来派宣言」を発表し、次のように「速度の美」を讃えた。

4. 我々は世界の光輝が新たな美によって豊かにされたと宣言する。その美とは速度の美である。爆発的な呼吸をするヘビのような管で飾られたトランクを備える競走自動車…射撃弾の上を走るような、咆哮する自動車はサモトラケの勝利の女神よりも美しい。

5. 我々はハンドルを握る人間を謳いたい。ハンドルの理想化された軸は地球を貫き、軌道回路上に地球を動かして行く⁶⁾。

イメージの中心にあるのはまさに自動車なのである。「ハンドルを握る人間」は〈文明の階段〉の最先端を象徴する存在である。

5. シトロエン社によるアフリカ縦断2万キロの旅

自動車がこのように産業的にも芸術的にも注目されていた時代、フランスのシトロエン社は無限軌道自動車による大規模な遠征事業を試みた。1924年10月28日、8台の自動車はアルジェリアのコロン＝ベシヤールを出発、サハラ砂漠を横断し、チャド湖、コンゴの熱帯雨林地帯を通過してアルバート湖にまで東進し、そこで4ルートに分かれ、1925年6月26日、マダカスカルの首都に到着した。全行程2万キロを超える大旅行であった。ほぼ同時代の架空の旅『コンゴのタンタン』が世界の多くの言語に翻訳されて現在その知名度は非常に高いのに対し、この未曾有の現実の旅は忘却に沈んでしまったように見える。しかし同時代の出来事としては、ベルギーの子供向け新聞の連載マンガとは比べものにならない反響を及ぼしている。

電報を使って定期的に通信が行われ、大新聞はそれをもとにニュースを伝えている。本国の人たちはこうして、日々、遠征の進行をフォローすることができた。[中略]使節は、1925年8月、フランスに帰還した時、共和国大統領によって英雄として迎えられた。(Murray 106)

この「英雄」たちの目的は何であったのか。草創期からまだ遠くない自動車産業は、この時代、様々な模索が続いていた。創業者アンドレ・シトロエンは、走路の限定された四輪車に対し、あらゆる地面を走行できる無限軌道車に強い関心を持ち、アメリカの独占的狀態にあったその市場への参入をはかろうとし

た (Wolgensingher 154-55)。サハラの往来はラクダに頼ってきた。そのラクダのスピードと積載能力は今や十分ではない。「ラクダは死に、シトロエンがそれに代わる」、これがアンドレ・シトロエンの示したビジネス指針であった (Sabatés 32)。

しかしそれでも、このアフリカ縦断旅行が大きな反響を及ぼしたのには、ビジネス展開に留まらない多様な次元が含まれていたからであろう。遠征隊には学者、画家、映画人が参加しており、協力機関として国立自然史博物館、フランス地理学会などが挙げられている (Haardt V)。こうして帰国時には、2700メートルの映画フィルム (ドキュメンタリー映画50本分に相当)、写真8000枚以上、絵やスケッチ500枚以上、また動物標本として哺乳類300体、鳥類800体、昆虫15000体を持ち帰った (Wolgensingher 163)。1926年10月から数か月にわたりルーヴル宮で特別展示会が開催されている。また記録映画『黒い巡航』が制作され、早くも1926年3月にはパリ・オペラ座で公開され、フランス中で大成功を収めている (Murray 106)

6. 学術の進展と支配の拡大

シトロエン隊が以上のように知識・学術の発展に貢献することを重要な目的の一つとしていたことは確かである。しかしやはりここで注意しておかなければならないのは、西欧の中心化過程において、知識・学術の進展は領土の獲得や経営と強く結びついてきたということである。例えば、国王ルイ15世はフランス最初の世界一周航海を送り出すにあたり、指揮官ブーガンヴィルに次のような指令を与えている。

これらの「太平洋の」島々、あるいは大陸は今漸くにして知られ始めたところであり、この知識を完全なものにすることは大変興味深いことである。しかも、ヨーロッパのいかなる国民も未だこれらの土地には植民地も権利も持っていないのであるから、もしもそこが我がフランスの貿易と航海に有益な諸物を提供しうるならば、そこを探索して所有することは我が国にとってひたすら有利なことでありえよう。
(Bougainville IX)

マドリード、リスボン、アムステルダムと移動してきた地球の中心がロンドン、パリへと移りつつあった18世紀後半の言葉である。知の進展と支配の拡大は手を携えて進んでいる。そして20世紀前半、英国に次ぐ植民帝国となったフランスはシトロエン隊を送り出し、そのルートは、アルジェリアから中央アフリカを通りマダガスカルまで、ほぼフランスの植民地域であった。アルジェリアでの出発に際し、フランス軍の連隊長は次のように祝辞を述べている。「フランス及び諸外国のアフリカ植民地は、一世紀にわたる我が国の植民地拡張によって、人間性・正義・幸福の面で進化することができたのであります。諸君らはこれからフランスの三色旗を掲げてその地を踏破して行くことになります。全軍が、全フランスが、誇りと賛嘆の念を持って、敬意を表しにやって来ております。諸君らの使節によってこの事業は必ず確実なものとなることでありましょう」(Haardt 5-6)。この遠征には植民地省や戦争省が協力し、帰国後、隊長ジョルジュ＝マリ・アアルトは、諸国の経済状況、植民地間の関係、空路開設の

可能性等について様々な報告書を政府に提出している(Ruchaud)。

知と支配の連携を支える基盤は、上述の連隊長の言葉にも窺われるように、〈文明化の使命〉観である。ジュール・フェリーは、「非宗教、無償、義務」の教育制度の創設者として名を残しているが、この政治家は、すでに言及した、アフリカ分割を決めたベルリン会議(1884-85年)の時期のフランスの首相であり、1885年7月28日には国民議会において次のように演説している。

優等人種は劣等人種に対して一つの義務を持っている、と明言しなければなりません。[…] 優等人種は劣等人種を文明化する義務を持っているのであります⁷⁾。

フランス共和制の教育制度の父は人種の優劣を確信する人種主義者であり、西欧に〈文明化の義務〉を託す政治家でもあったのである。しかしもちろんフェリーだけがこうした主張を展開しているわけではない。第一次世界大戦後に創設された国際連盟はその規約第22条で「文明化の神聖なる使命」を謳い、その「後見」任務の遂行を「先進諸国」に委ねている⁸⁾。

こうして、『コンゴのタンタン』が刊行された1931年、パリでは国際植民地博覧会が大々的に開催される。5月から11月まで、およそ800万人の入場者があった。植民地大臣ポール・レノーは開会の辞で「植民地化は歴史上最大の出来事」であると誇って、次のように述べている。

フランス人とは人種(race)ではなく国民

(nation) であります。したがって、フランスが語るのは、傲慢かつ残酷な基準、越えることのできない溝である人種の名においてではありません。そうではなく、人間的で優しい文明、普遍的性格の文明の名においてなのであります。(Le Monde a)

地球上のすべての人間が歩むべき〈文明の階段〉の、その最上階に輝く普遍主義への自信に溢れた演説である。博覧会場には実物大のアンコール・ワットも建造された。植民地大臣によれば、失われつつあったこの寺院を「救った」のはフランスなのである。シトロエン社もパビリオンを建てて参加し、アフリカ遠征隊の無限軌道車などを展示して、多くの観客を集めている。

『タンタンのコンゴ』の作者は、この時代、99パーセントのヨーロッパ人は植民地化について、黒人を援助しその魂を救う手段だと考えている、と後に語っている (Le Figaro)。これが時代の空気であったのであろう。しかし100パーセントではない。アンドレ・ブルトンやポール・エリュアールらシュールレアリスムの詩人たちは、「植民地博覧会へ行くのはやめよう」というマニフェストを発表し、政治家も宣教師も、シトロエンもルノーも「偉大なるフランスという新たな、絶対に許容し難い概念」を生んだ共犯者であると告発している (Le Monde b)。こうした勢力はまた、「植民地についての真実」という反植民地博覧会も組織している (1931年9月—1932年2月)。しかしその来場者数はわずか5000人ほどであった (Ruscio 109—111)。

7. 「黒い巡航」、夢の国へ

現実の紀行『黒い巡航』も想像の紀行『コンゴのタンタン』も、以上のような同じ時代の空気の中にある。タンタンとミルーが宣教師の仕事に驚嘆したように、シトロエン隊も、彼らが通行できるように数か月でジャングルを切り開いた白人の仕事に賛嘆している。もちろん実際にはそれは「4万人の現地人の努力」の賜物であったが、「[現地人の]一人でも働かせるのがどれほど難しいのかを知ると、これほどの結果には、ただただ称賛の言葉しか出てこない。」シトロエン隊はフランス国旗の横にベルギーの国旗を掲げて、熱帯雨林を穿つ、出来上がったばかりの道を進んで行った (Haardt 171)。

現実の旅も想像の旅も、植民地事業に若者たちを駆り立てるという意図の点でも軌を一にしている。エルジェは、ベルギーの若者たちがコンゴ植民事業に関心を向けるよう、タンタンをコンゴに派遣するストーリーにして欲しい旨依頼されていた⁹⁾。同じように『黒い巡航』もフランス本国の子供たちを西欧外での活動に誘い出そうとしている。「この物語は、遠征の様々な波瀾、それを成し遂げた人々が克服した疲労・危険・困難に、真の冒険小説の性格を負っている。これから語られることは現実に起こったことなので、いっそう感動的である。若い世代はここに活力の健全な教訓を見出すに違いない」 (Haardt I)。両者ともに、若者たちが〈文明の階段〉を伝ってアフリカの植民地まで下りて行くよう鼓舞するのである。

すでに述べたように、シトロエン隊の帰国後に公開された映画は『黒い巡航』と題され、また、その紀行も同じタイトルであり、シト

ロエンのアフリカ縦断遠征は、一般に「黒い巡航」と称されることになる。1930年代に行われた、バイルートからヒマラヤを越えて北京まで中央アジアを横断する事業のほうは「黄色い巡航」と呼ばれるので、「黒い」という形容詞には人種的な意味合いが含まれていることは間違いない。それでは、陸地のツーリングがなぜ「巡航」なのか。

際限のない水の上に低い暗影、泡立つ航跡、渦巻く煙が光の中で溶け合う。船首は乳白色の海の中を突っ切り、この奇妙な艦艇は黒人たちの国を目指して巡航を続けて行く。(Haardt 21)

これは、サハラ砂漠の最大難所タネズルフトを越えた時の紀行『黒い巡航』の記述である。砂漠が大海に転換されている。蜃気楼なのか。確かにそういう面もあるが、この転換には古代から持続してきた神話関わっている。サハラ砂漠はもともと海であり、プラトンが書いていた、あのアトランティスはこの大海に存在したというサハラ説もあった。当時フランスではピエール・ブノワの小説『アトランティス』(Pierre Benoît, *L'Atlantide*, 1919) がサハラへの夢を誘っていた(Wolgensingher 155-56)。遠征隊に加わったジョルジュ・スペクトはこの小説が映画化された時の撮影者である(Wolgensingher 162)。遠征隊のすべての人が、この小説、この映画の幻影の下でサハラを横断していたのかもしれない。〈人生は芸術を模倣する〉という逆説はここでも真理なのであろう。いずれにしても、ブノワは『アトランティス』の中で、サハラ砂漠がもともと海であったことを強調

し、海の神ネプトゥーヌスの後裔である女王アンティアナが支配する「地上の楽園」(Benoît 123)を描き出しているのである¹⁰⁾。

ところで、なぜ女王なのであろうか。やはりここには、アフリカであろうがオリエントであろうが、その先の極東であろうが、非西欧の土地を女性によってしばしば〈表象＝代表〉させる西欧男性によるエキゾティシズムがあろう。オダリスクの画像は19世紀に溢れ、また非西欧世界の女性との疑似恋愛関係を描いてピエール・ロチは人気作家となった。

8. 〈文明の階段〉の最下段で

紀行『黒い巡航』は隊員によるピグミー族についての民族誌学的調査を長く引用している。ピグミー族はずっと火の使用さえ知らず、初期の人類のままのように見える。しかしその文明的遅れや停滞を憐れむのではない。その報告は水浴びにはしゃぐ女性たちの描写を次のようにまとめている。

昔の人類と今日の人類の間には恐らく1万年の隔りがある。しかし、お互い二人の双子の姉妹のようによく似ている…(Haardt 204)

クロード・レヴィ＝ストロースがブラジルの高地を調査旅行するのは、これから10年ほど後のことである。戦後出版された『悲しき熱帯』(*Tristes tropiques*)の圧巻は、ブラジルの奥の奥まで困難な調査旅行をして出会ったナンビクワラ族の記述にある。わずかの昆虫や木の実だけを食べ、新大陸の発明とされるハンモックも知らない彼らは火の回りで地面にじかに横になって眠る。この部族は

地上の富からはあまりに見放されている。はじめて彼らと野営する者はこれほどすべてを奪われた人間の有様を前にして苦悩と憐みに捉えられるという。しかし、「失われた結合のノスタルジー (la nostalgie d'une unité perdue) に浸るかのように、抱き締め合う」夫婦たちを見て、「人間的愛情の最も感動的で、最も真実な表現である何かを〔中略〕感じ取る」¹¹⁾。人類の原初の時代と20世紀を重ねるレヴィ＝ストロースのこの視線と『黒い巡航』の視線は別なものではない。〈文明の階段〉を降りて、その最下段で、一つの幸福を見出したのである。

西欧社会のみが生み出したと言われる民族学者の在り方について「民族学者は彼の存在自体が罪の贖いの試みとしてでなければ理解し難いものであるだけになお、彼自身の文明に無関心ではいられず、文明の犯した過ちについての連帯に無自覚ではあり得なくなる」(315-316)と述べるレヴィ＝ストロースとは異なり『黒い巡航』は西欧の犯した過ちについて罪責意識を持ったりすることはない。しかし、アフリカ大陸の長い踏破を終えて、『黒い巡航』は最後次のように結んでいる。

素晴らしい、過ぎ去った時間。我々は決してこの時間を忘れることはないであろうが、それをもう一度生きることもないであろう。なぜなら、時は決して後戻りしないからというだけではない。黒い大陸は至るところで侵入され、進歩によって襲撃されているからである。アフリカの神秘は終わるだろう。我々の白い車は前衛にすぎなかった。〔中略〕旧い世界は息絶える。空間を獲得するために距離を失くす — そう

して、未知なるものの魅力も失くしてしまうのである。(Haardt 305)

〈文明の階段〉を上がる「進歩」への確信に揺らぎはないし、エキゾティシズムも持続している。しかし、〈文明の階段〉を上がることで失われてしまう何か大切なものがあることに、漠たる不安、少なくとも憂愁のようなものを感じているように思われるのである。

結び

植民地体制が世界を構造化していた時代、本国から植民地へ赴くことは、〈文明の階段〉を下りて「未開」な土地、「野蛮」な土地に行くことであった。タンタンもシトロエン隊もこうして〈文明化の使命〉に躍動したのである。

レヴィ＝ストロースは、後にユネスコの依頼を受けて著した『人種と歴史』(*Race et histoire*, 1952年)の「自民族中心主義」の章でこう述べている。

近代人は、感情的にショックを与えてくる諸経験を非難し、知的に理解できない差異を否定するという二重の誘惑に駆られて、数多くの哲学的、社会学的思弁に身を入れ、そうして、互いに矛盾する二極の間に空しい妥協を打ち立て、諸文化の多様性が彼にとって持っている言語道断でショックな面を削除しようとしながら諸文化の多様性を説明したのである。

しかし、こうした思弁は〔中略〕実際のところ、すべてたった一つの方策に帰着する。それを規定するのに恐らく最も適当な

用語は疑似進化論であろう。その方策とはどんなものなのか。それはまさに、諸文化の多様性を完全に認める振りをしながらそれを抹殺しようとする試みである。なぜなら、遠隔地のものにせよ以前のものにせよ、人間の諸社会の様々な状態を、同じ点から出発して同じ目的に収束しなければならない唯一の発展の「段階」とか「時期」として扱うならば、多様性はもはや見かけのものにすぎなくなってしまうことは明らかなからである。人間は一つの同じものになってしまう。(Race et histoire 23-24)

19世紀のハーバート・スペンサーの社会進化論も福沢諭吉の文明論もこの「疑似進化論」に他ならない。レヴィ＝ストロースは、こうした単線的発展段階論が人間の多様性を「抹殺」する近代的世界了解だと批判するのである。

西欧から外に向かうタンタンもシトロエン隊も、また西欧の内側で国際植民地博覧会に押し寄せる人々も、皆、〈文明の階段〉の最上階に立っている。そしてその高い場所で、国際連盟規約の第22条が規定しているような「文明化の神聖なる使命」という手すりを握って、階下の人々を引き上げる「責任」があると確信していたのである。

西欧が世界の中心になり始めた16世紀、西欧により「発見」され「新大陸」と位置付けられた土地では徹底した破壊が進んで行く。そのことを正当化する重要な論拠は、彼らが人食い人種であり、人間として同胞扱いすることはできない、というものであった。この時代、フランスのミシェル・ド・モンテーニュは新大陸に赴くことはなかったが、その

著作『エッセー』の中で「人食い人種について」という一章を著している。このユマニストは、余計なものを一切持たない、「自然」そのままの彼らの生活を賛美し、さらに、「勇猛さ」という彼らの「高貴で高潔」な人間性を高く評価する。野蛮な外観と文明的な虚飾をはぎ取ったところに見えてくる、人食い人種の姿。それはモンテーニュが『エッセー』を著す精神的模範となっているし、宗教戦争下で残虐な殺戮を繰り返しているフランス社会への強い批判となっている。〈文明の階段〉の最低にあるとされる野蛮は、実は最上の文明を越える高みではないのか。この逆説が〈良き野蛮人〉(Bon sauvage) 論¹²⁾であり、これは西欧の中心化過程に連綿と持続したテーマなのである。

注

- 1) 本稿は、国際コミュニケーション学部表現文化学科オムニバス授業「クロスカルチュラル・スタディーズ」の2021年度総合テーマ「移動」をめぐる想像力(広瀬正浩教授を責任教員として、伊藤信博教授、長澤唯史教授、藤岡阿由未教授、水島和則教授、それに田所が参加)における田所担当回の講義内容を中心に執筆したものである。
- 2) 『芥川龍之介全集』、第5巻、248頁。ただし、現代表記に改めた。以下、福沢諭吉と横光利一の引用にあたっても同様である。
- 3) 初出は白黒版であり、戦後カラー版が出版されるに際し、内容も修正されている。白黒版については、<http://bellier.co/tintin>に掲載されているものを参照した。

- 4) 『コンゴのタンタン』については、その人種差別的表現などをめぐってベルギーでは訴訟も起こり、またイギリスの書店では子供用コーナーから撤去されるなど、各国で様々な対応が取られている。そうした中、日本語版のみは『タンタンのコンゴ探検』(川口恵子訳、福音館書店、2007年) というように、タイトルにも19世紀的探検物語の粉飾を施すなど際立った擁護的態度をとっている。こうした問題について詳しくは以下の拙論を参照されたい。「無罪判決を受けた『コンゴのタンタン』—許容のメカニズムの批判的考察—」(『絃説』第Ⅲ巻第11号、花書院、2014年)。
- 5) 戦後のカラー版では、タンタンの賛嘆の言葉は削除され、相棒犬ミルーの「ぴかいちだ、この宣教師さんたちは！」(36) という発話だけが残されている。
- 6) 11項目から成る「未来派宣言」は、1909年2月20日、フランスの新聞『フィガロ』紙に掲載された。本稿は<https://www.erudit.org>から引用した。
- 7) フランス国民議会のサイト(<https://www2.assemblee-nationale.fr>)に掲載されているテキストから引用した。
- 8) 国連ジュネーブ事務局のサイト(<https://libraryresources.unog.ch>)に掲載されている国際連盟規約から引用した。

国際連盟の成立にあたっては日本の代表団は人種差別に反対する条項を組み入れるよう提言しているが、それは採用されなかった。日本代表団のこの提言に関して詳しくは、鳥海靖「パリ講和会議における日本の立場：人種差別撤廃問題を

中心に」を参照のこと。また外務省のサイト(<https://www.mofa.go.jp>)の「外務本省外交資料Q&A大正期」においても、牧野伸顕の写真を掲載しつつ紹介されている。

- 9) 『タンタンの冒険』シリーズの公式サイト(<https://www.tintin.com/>)は、フランス語・英語・オランダ語・スペイン語・中国語・日本語の6言語で展開されている。本論で記述した内容を含め、『コンゴのタンタン』と1930年代の植民地主義との関わりについて、日本語サイト以外の5言語では明確に記載されている。詳しくは前掲の拙論を参照されたい。
- 10) 西欧の中心化過程において、非西欧世界に「地上の楽園」を認める心性は珍しくない。前述のブーガンヴィルもタヒチ島についてそのように書き記している(Bougainville 138)。
- 11) 川田順三訳(159頁)。ただし、本論の展開を明確にするために、「la nostalgie d'une unité perdue」(*Tristes tropiques* 293) という表現については直訳的に変更した。
- 12) 〈良き野蛮人〉論について詳しくは、次の拙稿を参照されたい。「〈良き野蛮人〉論の強みと弱み—ディドロとモンテーニュを中心に—」(『異文化への視線—新しい比較文学のために』佐々木英昭編、名古屋大学出版会、1996年)。

主な引用文献

(ウェブ・サイトについては、2022年1月5日にすべて確認した。)

芥川龍之介 「舞踏会」、『芥川龍之介全集』、

- 第5巻、岩波書店、1996年。
- 「上海游記」、『芥川龍之介全集』、第8巻、同上。
- 鳥海靖 「パリ講和会議における日本の立場：人種差別撤廃問題を中心に」、『法政史学』、46巻、1994年。
- 福沢諭吉 『学問のすゝめ 初編』、『福澤諭吉全集』、第3巻、1969年。
- 『文明論之概略』、同上、第4巻、岩波書店、1970年。
- 「脱亜論」、同上、第10巻、1970年。
- 横光利一 「上海」、『横光利一集』、『現代日本文学全集』、36、筑摩書房、1954年。
- レヴィ＝ストロース、クロード 『悲しき熱帯』、下、川田順三訳、中央公論社、1977年。
- Benoît, Pierre. *L'Atlantide*, Albin Michel, 1920.
- Bougainville, Louis-Antoine de. *Voyage autour du monde, par la frégate la Boudeuse et la flûte l'Étoile*, La Découverte, 1985.
- Crespel, Yves, Benoît Verley. *Hergé, Tintin et les trains*, Casterman, 2015.
- Dépêche coloniale*, «L'Exposition coloniale, Journée d'apothéose» (le 7 mai 1931), lemonde.fr, archives, le 28 mai 2021.
- Figaro (Le)*. «Tintin au Congo n'est pas raciste, selon la justice belge», lefigaro.fr, le 10 décembre 2012.
- Haardt, Georges-Marie, Louis Audouin-Dubreuil. *La croisière noire*, Plon, 1927.
- Hergé. *Le lotus bleu*, Casterman, 1974.
- . *Tintin au Congo*, Casterman, 1974.
- Lévi-Strauss, Claude. *Race et histoire*, 1952, Denoël, 1987.
- . *Tristes Tropique, Œuvres*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 2008.
- Loti, Pierre. «Un bal à Yeddo», *Japoneries d'automne*, Calmann-Lévy, 1889, <https://gallica.bnf.fr>.
- Memmi, Albert. *Portrait du colonisé, précédé du portrait du colonisateur*, 1957, Gallimard, 1985.
- Monde (Le)*, a. «La colonisation est le plus grand fait de l'histoire» : quand la France célébrait son empire lors de l'Exposition coloniale de 1931», lemonde.fr, le 28 mai 2021.
- , b. ««Ne visitez pas l'Exposition coloniale» : le manifeste du groupe des surréalistes en 1931», lemonde.fr, le 28 mai 2021.
- Murray, Alison. «Le tourisme Citroën au Sahara (1924-1925)», *Vingtième Siècle : Revue d'histoire*, n°. 68, octobre-décembre 2000.
- Ruchaud, Jean-François, «Les Croisières Citroën : mécénat ou promotion», in l'exposition Alexandre Iacovleff. Les Croisières Citroën (1er décembre 2012 - 10 mars 2013), Musée de l'abbaye Sainte-Croix, <http://www.croisieres-citroen.com>.
- Ruscio, Alain. «Contre l'Exposition coloniale de 1931 (Paris-Vincennes) : Des voix fermes, mais bien isolées. Aperçus», *Aden*, 2009.
- Sabatés, Fabien. *La Croisière noire Citroën*, Baschet, 1980.
- Wolgensinger, Jacques. *André Citroën*, Flammarion, 1991.